

聞き手：橋爪大三郎

—蘇越さんの履歴を、まずうかがいましょう。

私は1955年9月、北京の生まれです。1975年4月に、北京実験中学高等中学（高等中学は日本の高校に当たる）を卒業し、ある大学に入りました。それから、中央芭蕾舞（バレエ）団の首席ヴァイオリニスト、胡宗成、呉王坤の両氏について、ヴァイオリンを勉強し始めました。1978年には人民解放軍の、中国總政交響楽団に入団し、ヴァイオリンとヴィオラを弾きました。そのあと1979年から自分で、作曲の勉強をしました。徐新（中央音楽院教授）、畢耀宗（沈陽音楽学院教授）両氏の指導を受けました。

それからいよいよ、作曲を始めました。最初は、クラシック風の作品を作っていたのですが、外国からだんだんポップス、ロックといった音楽が入ってくるようになりました。中国に当時、そういう種類の音楽はありません。まだとても若かった私は、大変刺激を受け、いろいろ考えて、中国独特のスタイルを持ったポップスをぜひとも作りたい、と思いました。

蘇小明という、中国で最初に有名になったポップスの歌手がいます。彼女のために、いろいろな曲を作りました。

—それは、何年ごろのことですか。

1979年のことです。彼女は、とても有名な歌手になりました。ポピュラー音楽が中国に根を下ろしたのは、彼女からだと言ってもよい。そして、ポピュラー音楽の作曲家も、沢山出てきました。作品も、数多く生まれるようになったのです。

—その時、蘇さんはどこにいたんですか。

ずうっと北京です。先生が北京にいますからね。

1980年から1985年までは、テレビドラマや映画の仕事をしました。

ちょうど新しい楽器が、外国から入ってきた頃でした。ROLANDのシンセサイザーを、中国で始めて使ったのは私です。それは、1982年、テレビドラマの音楽の中です。中国唱片（レコード）社の録音室に、この楽器があったので、そこで録音したわけです。

—楽器は、ただ置いてあったんですか。

そうです。最初は使い方を、誰も知らなかったんですよ（笑）。どんな音を出したらいいのか、とても難しく感じました。

それと、ドラムですが、いちおう1950年代からあったんです。でも、文化大革命のあいだ、全然使えませんでした。使わないように、政府が指示したんです。

新しい楽器を使うようになって、音楽のスタイル（「風格」）も変わりました。私も、社会の問題についてとか、音楽の内容をどうしたらいいとか、いろいろ考えました。私の考えはね、いま世界中アメリカの音楽、アメリカのスタイルでしょ。まあ、イギリスの音楽とかもあるけれど。いっぽう、中国は人口がとても多いわけです。でも、音楽はまだまだなので、私たちが一所懸命がんばって、その水準を高めたい。早く世界の水準に追いつきたい、と思っています。

さて、1985年からは、中国政府の文化部（日本の文部省にあたる）に所属して、仕事をしました。文化部の下にある、中国録音録像出版総社（カセットテープとビデオの会社）で、作曲の仕事、ならびに、スタジオ録音の監督の仕事をしました。全国から歌手になりたい人が集まってくるので、それを審査したりもしました。そして、カセットテープを沢山作りました。

この頃、中国の音楽も、アメリカ、日本、香港、台湾、イギリス、……各国の影響を受けたのです。そうして、ポップスの作曲家も、大勢誕生しました。

そのなかでも、私の作った音楽がヒットし、私が作曲家として有名になった理由は、中国の民族の音楽と、西洋音楽（世界の一番水準の高いポップス）とを結合した点にあると思います。音楽の感じは、自分の国（中国）の感じで、決してよその国のものではない。聴いたら、中国の音楽だと、すぐわかる。これが一番大事だと思います。でも、技術は、

世界で一番進んだものと、同じようではなければならない。早く追いつきたいと思っています。

—なるほど。蘇さんが、知り合いがとても多くて、中国のポップスの事情に詳しいのは、文化部にいたからですか。全国から北京に、歌手も作曲家も集まるのでしょうか。

いいえ、文化部に入るまえから、ポップスをやる友達は多かった。

—そうか、人数も少ないし……。いまはどうですか。知っているひとばかりですか。それとも、知らない人も出てきましたか。

去年の12月から今年の1月にかけて、私、帰国しましたでしょう。国のいろいろな賞をもらいましたから。「新時期十年」の金賞とか。いろいろな曲が出てきましたね。

—じゃあ、上海とかから、いいものが出てきましたか。

いま中国で先端的なのは、まず北京です。北京が一番だと思います。

—私もそう思います。

二番は、広州。……上海は、50年代のスタイルの影響が残っているからだめ。

—広州は、離れているけれど、どうして進んでいますか。

それは、香港が近くにあるからです。北京の場合は、全国の、ポピュラー音楽を作る人や、始めたい人が、みんな集まるからです。

\*

—では、今日は、新しいところから聞きましょう。古い話はまた次回に。

このあいだ、テレビ神奈川の関さんから、カセットテープを2本借りました。（「新西北風」「河殤」の2本を、蘇さんに見せる。両方とも、蘇さんの「黄土高坡」が入っている。）

これは私は、本当に見たことがない。知りませんでした。この間、国へ帰ってみたら、知らないうちに、「黄土高坡」の入ったテープばかり（笑）。私は日本でアルバイトをしていたから、何もわからない。

—蘇さんの名前が間違って、「胡越」なんて印刷してあるのもありましたよ。

そうですか（笑）。

—「河殤」は、問題になったテレビ番組ですね。党の偉い人が文句をつけた……

ええ。ただ、私は見ていません。

—で、「西北風（しーべいふん）」とか、「西部摇滚（しーぶやおぐん）」とか言われるもの、中国のロックのことですが、私の聞くところでは、1985年ごろ、崔健という人が出てきて……

いや、ちょっとちがいます。「一無所有」のことでしょう。「一無所有」が発表されたあとで、彼は記者会見をしました。そこで、崔健は、この歌は中国の民族音楽と全然関係ない、とはっきり言ったのです。

—へえー。じゃあ、どうやって作ったんだろう。

アメリカのようなものを、自分の感じで。崔健は、アメリカやベネズエラなどの外交官の息子さんたちと一緒にバンドを作って演奏していますからね。

—なるほど。では、中国ポップスとは言えない……？ 中国人のポップスではあつけれど。

これ、「西北風」と、本当に関係ありません。彼が自分でそう言いましたから、正しい。中国の民族の音楽のスタイルでやらなくても、自分のスタイルが一番と思っただけです。崔健という人は。

—でも、いわゆるシンガー・ソングライターですよ。自分で曲を作り、自分で歌うわけですから……

崔健の考え方はね、アメリカ人は中国の音楽を聞いたことがないでしょ。アメリカの音楽の水準は、一番高いでしょ。民族と関係ないんですよ。でも私は、ちょっと違います。私は中国人ですから、自分の民族の音楽をやりたい。でも、世界中で一番進んだ技術を使ってやりたい、ということです。

—崔健は、「一無所有」が有名で、あと知らないんですが、ほかにどんな曲を作って

いますか。

ほかに、「假行僧」などがあるようです。

——作っていることは、作っている？

ええ、沢山あります。専集（自分の作品を集めたテープ）はないけど、曲はあります。ああ、いいものを見せましょうか。これは、香港で発売された、「開天闢地」というテープで、私の曲が7曲も入っていますけど、崔健の曲が2曲。ほら、1曲目が「最後一槍」でしょう。（そのほか、「西北風」を紹介する香港の新聞・雑誌記事のコピーを見せてもらう。）

——これだけ、新聞記事になっているということは、みんな関心があるんだなあ。

いま中国で一番有名な、西北風の代表作品は、「紅高粱（赤いコーリャン）」。

——ああ、「妹妹……」の曲ですね。私はそのカセットを持っていて、よく聞いています。

でもあれは、ほんとのポップス音楽ではありません。

——あと、「酒神曲」も有名でしょう？

ええ、でも、「妹妹你大胆地往前走」のほうが有名ですね。誰でも知っている。でも、本当に「西北風」のスタイルで、音楽的にもちゃんとしているのは……

——蘇さんの、「黄土高坡」ですよ。ね。「信天游」は？

「信天游」は、とてもいいと思います。

——ぼくもいいと思います。じゃあ、「黄土高坡」と「信天游」のふたつですか。

そうです。

——やっぱりそうかあ。あと、「一無所有」もそうかなあと思っていたけど。じゃあ、「我熱戀的故郷」は、どうですか……

これは「人民日報」の付録で、「新時期十年」（1979-1988）のヒット曲を、読者が投票したものです。私の曲、「血染の風采」と「黄土高坡」が、2位と3位に入っています。「信天游」は9位。「一無所有」は14位。

——へえ、これ（「大約在冬季」）は台湾の曲だけど、入ってるんだ。……あ、日本のもあるんだ、「北国の春」。

中国で最初のポップスのヒット曲は、蘇小明という人の、「軍港之夜」です。私ではなくて、他の人（劉詩召）が作曲しました。これが、1980年。彼女は、5年前にフランスに行きました。いつも外国人と一緒に、コンサートをやります。（人民日報の、歌手のランキングをみて）こういう人（李玲玉）は、大衆的（「人民風格」）で、（日本で言えば）工藤静香なんかと同じ。よくないと思います。顔はきれいだけれど。

——どういうふうにして、「西北風」が始まったか、一番知りたいですけど。

崔健の「一無所有」は、自分じゃ「西北風」と全然関係ないと言っているけれど、音楽の形が「西北風」の形です。

——なぜでしょう？

わかりません。

——自分でそのつもりがなくても、「西北風」がいつのまにか、入ってしまった。それで、聴いた人が、崔健の曲は「西北風」だと思った、ということ？

そうです。

——じゃあ、まんざら関係ないわけじゃなくて、少しは関係あるんだ。

「一無所有」は、1986年の曲です。この曲を、最初私が録音しました。

——あ、そうですか！ それは大変。

そのあと私の会社から、カセットで発売しました。崔健だけでなく、いろんな人と一緒にね。でもその中で、有名になった歌は、これだけです。

1986年の発売でしたが、1987年でもまだ有名にならない。ところが1988年、崔健は、政府にコンサートを禁止されてしまった。それで、いっぺんに有名になってしまったわけです。

——なぜ、禁止になりました？

それはね、彼の歌が、政府を批判したからです。曲の名前は、「新長征路上的搖滾」。歌詞に問題があって、……「二万五千里の長征なんて、聞いたことはあるが、見たことはない、とても信じられない」という意味ですから。……意味深長ですよ。

——この人は自分で、詞を作るんですね。そういう人はまだ、多くないですねえ？

だから、有名になった。

——そこが、アメリカやイギリスで受ける理由ですね。アメリカやイギリスの人は、みんな自分で作って歌うから、仲間だ、と。

そのあとで、「西北風」の音楽が、みんなの注目を集めるようになったのです。

ところで、私の「黄土高坡」は、崔健の「一無所有」と同じ時期の作品です。1986年の年末に作曲しました。ちょうど私は、自分の専集を作ろうとしていたのですが、その時はこの曲が、いい曲ではないような気がしたのです。だから、ずっと発表しなかった。そのあと、張静林さんと知り合って、こういう歌があると彼女に歌って聞かせたら、張さんはとってもいい歌だと感心して、早く発表して下さい、と言いました。

——それは、何年ごろですか？

1987年。

——それで、その気になった。

そうです。それで、すぐ発表しました。1987年の7月。

——このころ、「西北風」のブームがそろそろ……？

いや、まだない。

——でも、映画が。「黄土地（黄色い大地）」（1984年制作、公開は1986年？）と「紅高粱」。これ、両方とも、「西北風」の関係ですね。

そうです。

——「黄土地」は、タイトルのあとに「信天游」がどうのこうのというテロップが出てくる……

いえ、「信天游」は、もっと早い。1986年の年末です。でも、北京でみんなが聴くようになったのは、1987年になってから。

——映画がいつ公開されたかが問題ですが、「紅高粱」（1987年制作、1988年公開）は、去年みんなが騒いでいたのだから……

1988年に有名になった。

——1988年に、ベルリン映画祭で金熊賞（1等）をとったから、中国中で観て、大騒ぎになった。……でも作ったのは、1987年ですよ。

うん。

——で、音楽は「西北風」で行こう、ということになっていたのですね。「黄土地」のほうが古いですよ。でも、これは音楽が、オーケストラが入っていて、ロックでない……本格的な民歌です。

——あと、映画のなかで、結婚式の場面で、農民のお兄さんが歌を歌うシーンがありました……。

陝北（しゃんべい）の、民歌です。

——映画の制作をしたのは、廣西制作所ですね。

「黄土地」の監督、陳凱歌は、北京の人です。北京映画学院を卒業したあとで、そちらに行きました。「紅高粱」の、張藝謀は西安の人です。

最初のこういうスタイルの映画は、「八個和一個」といいます。解放軍を題材にする映画で、内容はあまり面白くないが、カメラはとてもよかった。日本と中国の戦争が描かれているので、日本で公開されないみたいですけど。カメラは張藝謀。1984年制作、1985年公開の映画ですね。

——じゃあ映画が、「西北風」の、源泉のひとつになっていると思っていいですか。改革以後、四、五年して、映画や音楽に、そういう新しい感覚が出てきたのかなあ。映画をいくつか観ましたけど、彼らは文革世代で、下放されて、陳凱歌は雲南へ行くとか、みんなすごい田舎で苦勞したわけです。そこで、「西北風」の感覚みたいなものがわかって、

それから都会にもどって、……

いやあ。中国で「西北」というと、広いけれども、貧しいところでしょう。その人びと、農民とかは、お金がなくても歌います。とても楽観的です。それがいわば、中国の縮図になっているとも言えるわけです。それに、その地方の音楽は、とても力強い感じのもので。自然で、素朴というか。とてもいいメロディーです。

——「黄土地」でも出てきましたけど、解放軍の軍人さんが、陝北に民歌を集めに行きますねえ。解放軍の軍歌にしようというので。それは、本当ですよ。すると、解放軍の歌のなかに、こういう感じのものがあるわけですね。

あります。……でも、人民は歌いません。解放軍の人だけ。有名な歌が少ないです。

——あ、本当ですか。

戦争の頃に、有名な歌はあったらうけれども、解放後はあまり歌いません。

——じゃあ、みんな解放軍の歌は知らないんですか？

ええ。私も知らない。戦争世代の人は、たぶん知っているのでしょうか。

——学校では、どんな歌を習うんでしたっけ。

小学生のために、専門に歌を作りました。中学校もそうです。民歌も入っています、編曲して。もとの民歌は誰も知らないでしょうが。もとのかたちに近い曲もあります。

「紅高粱」の歌は、民歌。本当の民歌です。作詩は、ほかの詞に変えて。

——すると、この歌が出てきたとき、流行ったのは、聴いたことあるからなのか、それとも、聴いたことないから面白い、ということなのか？

それは、半々というところでしょう。何年も前、子供のころ、「西北」の歌はみんな聴いているわけです。学校でいちおう勉強しますからね。でも、民歌を教えるときに、唱い方が全然違います。民歌の歌の「風格」。(テープで、民歌とポップスとを聴き較べる。)発声が全然違うのです。子供のころ、ポップスはまだなかったから、自然な発声の方法ではありませんでした。

——民歌にも、いろいろあるから、地方によって、発声法も同じじゃないでしょ。

ええ。「紅高粱」が有名になった理由は、2つあります。ひとつは、メロディー。聴きやすく、いいメロディーです。誰でもすぐ覚えられます。もうひとつは、自然そのままの発声法です。ポップスと同じ。みんな、とても喜んで歌います。

——そういう歌がなかった、ってということですか。

そうです。あることはあるけれども、メロディーが違います。メロディーが聴きやすいのが大切でしょう？

——あと、「西北風」のブームのきっかけというと？

テレビはあまり関係ないですねえ。

ああ、そうそう、「西北風」が新しいスタイルになった原因はねえ、ふつうの民歌じゃなくて、現代の楽器を使って、編曲をして、ロックのリズムでやっている。それが、外国からの影響でしょう。時代感覚と言ってもいいです。

——映画では、特にカメラが素晴らしいかと思えますが、ああいう新しい感覚のことですか。素材は昔からあったものかもしれないけれど、使い方が大変新しい。

そうです。音楽も同じです。だから、新しいスタイルになりました。

——もっと前だったら、受けなかったかもしれないけれども、みんな、ああいい音楽だなあ、と思うようになったんですねえ。タイミングが良かったんですね。

ほかには、なにかありますか。これで全部かな。

中国の、最近の情勢はね、早く中国も、世界のなかで強力な国になりたい。そうみんな思っています。だから、「西北」=陝北の精神が欲しいわけです。

——なるほどね。すると、「我熱恋的故郷」なんか、そういう歌詞ですか。

あの曲は、ほんとうはね、「西北」ではなくて、河北邦子(戯曲)なんです。でも、ロックの編曲にしてある。「私のふるさとはいきれいでない。水がない。お金もない。なにもない。でも私はとても愛している」、という歌です。

——だから、気持ちが同じでしょう。中国が、早く大きくなるように、という……。おそ

らく、ナショナリズムの感情だと思う。

そうです。

——前に、毛沢東のときもそうだったと思うけど、もう一回、こんどはもっと若い人たちがそういう気持ちになった。それで、若い人が新しい音楽を聴いて、ああこれだ、と思ったのではないかなあ。

いや、若い人に限らず、民族のメロディーは、誰でもみんな大好きですよ。メロディーがやさしくて、歌いやすい。「我熱恋的故郷」もそうです。なかには崔健の「一無所有」みたいに、若い人だけに人気のある曲もありますけどね。

それから「少年壮志不言愁」という曲は、「西北風」のカセットによく入っているけれど、「西北風」ではない。

——ややこしいなあ。

1980年から、1985年、86年ごろまで、中国の映画や音楽には、民族的な要素が少なかったんです。みな外国のことに目が向いていた。情報が、急に沢山入ってきましたからね。みんなの関心は、外国のこと。そこで、芸術家は、自分の感覚を大切に、民族の芸術を捨てないように、と警告したわけです。

——それで、1985年ごろから、そういう作品が出てきた、と。

そう。その時、若者も老人も、政府の人もみんな、民族の心を忘れないことは大切だ、と思った。民族の精神を、呼びさましたわけです。それも、原因でしょう。

——では、「黄土高坡」ですが、これもいまみたいな気持ちで作りましたか。

私は、みんながこのメロディーを好きかどうか、自信がなかった。研究会のなかで歌ってみたら、みんなにいい曲ではない、と言われた。

——聴いていたひとが悪かったんだな。どこをとってもよく出来ていて、非のうちどころのない曲ですけどね。

私の「黄土高坡」の前に、「信天游」が出ました。作曲は、解承強。私の友達です。最初に歌ったのは、たぶん王菲。でもあとで、程琳が歌って有名になった。「黄土高坡」もそうだけど、何人もの歌手が歌うんですよ。日本で、そういうことはないでしょう？

候徳建という人を知っていますか。台湾から中国にやってきた、有名なポップスの作曲家です。「龍的傳人」が一番有名で、あと「酒干滴賣無」とか。中国の民族の心を求め、新しいスタイルをめざしてやってきたのです。中国の音楽界は、この人に触発され、いろいろと影響されました。候徳建さんは、「西北風」も作っていてね、「三十以後才明白」という曲です。

——へええ。台湾の人にも、「西北風」は受けるかなあ。

聴いたことがないでしょうね。でもいま、私の曲を歌っているそうです。最近、台湾で7万人の大集会があって、そこで、台湾の有名な歌手が、私の歌を歌います。7万人！私もびっくりしました。

2ヶ月前、台湾で、崔健のテープが発売になりました。香港でも、大きい広告が出ているそうです。

——台湾の話になったついでに、斎秦のことを聞きます。どれくらい台湾で有名な歌手ですか。去年「北方的狼」が、上海ではえらく流行っていたけれども。

2、3年まえに出てきて、若い人が聞いている。とても有名というところまでいかないで、まあまあという人のようです。でもいま中国では、すごく有名です。

——もしかしたら、「北方的狼」というのは、「西北風」を意識して、受けようと思って真似したのではないかな。

ぜんぜん違います。斎秦の音楽のスタイルは、南の方のですね。北の方ではない。「南方的狼」だ。

あと、「西北風」でいいのは、「祖国賛美歌」とか、「山溝溝」という曲ですね。